

特集 「都市」に寄せて

吉 井 秀 夫

二〇〇六年から復活した史学研究会の例会も、二〇一一年四月一六日に早や六回目を迎えた。「都市」を共通テーマとし、五人の報告者による報告が行われた今回の例会にも、多くの方々に参加していただいた。一つのテーマのもとに、歴史学のさまざまな分野で活躍されておられる方々に報告していただく例会のスタイルについて、一定のご理解・ご支持をいただいていることに感謝申し上げたい。当日の報告を元にした論説に加えて、さらに数名の方々に寄稿いただいたのが、本特集号である。

私事で恐縮であるが、私が常務理事を拝命して最初の仕事で、今回の例会のテーマを設定することであった。テーマについては、毎回さまざまな方々に候補となる案を提案していただいている。それらの中から、他の常務理事の方々と共にテーマを選んでいくのだが、いざ検討してみると、様々な専修から講師を推薦していただけるようなテーマの設定が、容易ではないことを痛感させられた。実のところ、今回のテーマが最終的に「都市」になった理由の一つに、いくつかの候補のうち、私の属する考古学専修でも講師を推薦できそうなテーマだから、という配慮があったことを、ここで告白しておきたい。

考古学を学ぶものが、「都市」からすぐに連想するのは、二〇世紀を代表とするイギリスの考古学者ゴードン・チャイルドが、人類史上の大きな画期の一つとして、農業のはじまり（農耕革命）と共に、都市の出現（都市革命）に注目したことである。チャイルドの議論は、西アジアの遺跡の様相をもとに展開されたものであるが、他地域における「都市」をめぐる議論にも参照されてきた。しかしその結果、南アメリカ大陸のように、チャイルドの理論では説明できない場合が

あることも指摘されることになる。

日本考古学においては、大阪府池上曽根遺跡に代表される大型の環濠集落を「都市」とみなす説をめぐって、さまざまな議論が交わされたことが記憶に新しい。池上曽根遺跡でみつかった大型の高床式建物を中心とする居住空間に、宗教的・政治的な機能があつた可能性や、工房の存在などにより一定規模の手工業が存在したことを認める研究者は少なくない。しかし、そうした要素の存在をもって、大型の環濠集落を「都市」と認めるかどうかは、個々の研究者が、「都市」をどのように定義するかにかかっている。

このように、考古学の分野に限ってみても、「都市」が重要な研究対象であることは認めながらも、その定義や関心はさまざまである。地域や時期が違えば、「都市」に対する定義や関心にはさらに大きな違いがあることは、今回の特集号に寄せられた論説をお読みいただければ、容易に理解していただけるであろう。

まず、戦国末期から秦代における県を取り上げた土口論説は、県を「都市」と認定する諸要素のうち、行政機能に注目する。睡虎地秦簡や里耶秦簡といった新たな文字史料を手がかりとして明らかにされた、県廷を中心とした司法行政の実態は、「城郭都市」の構造を考える上でも、大きな手がかりとなるように思われた。

一方、向井論説は、曹魏代における洛陽宮城の構造をめぐる最近の研究動向において、考古学的調査の成果が大きな役割を果たしていることを示している。しかし、この時代においては、文献史料の再検討が並行しておこなわれることが必要であることはいうまでもない。

同様なことは、中国で発達した都城の影響を受けて登場した、日本最初の計画的な都城である、藤原京の研究についてもいえるのである。藤原京の構造については、岸俊男の復元案が、その後の研究に大きな影響を与えてきた。しかし、綿密な発掘調査成果の蓄積により、宮や京の具体的な様相が明らかになりつつある。深沢論説は、そうした研究の現状を確認しつつ、文献記録との対照により、二時期の条坊遺構の施工をめぐる解釈例を提示している。

西欧の中世都市といえば、私のような門外漢でも「自由と自治」というキーワードが連想される。図師論説は、そうした都市の一つである南仏のトゥールーズを舞台として、一三世紀にフランス王権が都市に対する統治を開始しようとする新しい局面において、「異端」がどのように扱われたのかを、文書の利用という観点から検討する。

藤本論説は、近世上方支配の特質およびその歴史的展開を、江戸幕府直轄都市と譜代半の關係に注目して明らかにしようとする。江戸幕府の西方の拠点であった大坂城を中心とした上方の支配の変化が、幕府における全国的な支配体制の変化と密接な關係にあることが示されている。

和田論説は、一七世紀のインド・コロマンデル海岸に所在し、オランダ東インド会社やイギリス東インド会社が商館をおいた、マドラス・プリカット・マスリパトナにおいて、要塞や市壁を中心として都市が形成されていく過程の違いを検討する。交易が港町の繁栄の主要因である点は共通するものの、様々な外的要因が働いた結果、都市の姿が大きく異なったことに、個人的に興味を引かれた。

一方、山元書評でとりあげられた『韓国近代都市景観の形成』は、植民地化に伴い、朝鮮半島に日本人が移住したことにより、都市・鉄道町・漁村の景観がどのように形成されたか、そして日本人が去つて後にどのように変容したのか、建築史学の立場から検討している。

長井論説は、一九世紀のバリを舞台として、フランス各地の地方からの移住者の様相を、同郷会の様相と、カトリック教会との關係を手がかりに検討する。その結果、移住者の「受け皿」としての機能がある程度果たしながら、その言語的・文化的な特殊性に言及することがまれであった、という結論が下されている。

一方、中野論説は、一九二〇年代のシカゴに現れた多様な都市改革運動と言説を取り上げて、アメリカ現代史における都市認識の変遷を考察する。その結果、都市をひとつの有機体としてとらえようとした二〇世紀初頭の思考が、第一次世界大戦時における都市動員を契機として、人種・エスニック間対立を表面化させ、都市空間を社会的、階層的に分画され

た構造とみる認識が定着していったことを明らかにした。

山本論説は、「記憶」と「語り」をキーワードとして、「ヒロシマ」研究の動向を整理すると共に、サークル誌を用いた新たな研究の方向性を示した。また梶書評では、現在はリトアニア共和国の首都である都市「ヴィリニウス」を舞台とし、中世以降にこの地を訪れた人々の「記述」より、この都市の表象の歴史を検討した本を紹介していただいた。

常務理事の役得として、企画段階から各報告の内容に触れ、特集に寄稿された論説を読ませていただいた中で感じるのは、自分自身の研究視野の狭さと、これまで知らなかった研究に触れることのできる喜びである。本特集号を通して「都市」研究の「多様性」に触れていただき、その中から「都市」にまつわる諸問題を考えていくための、さまざまなヒントをみつけていただければ幸いである。

（本会常務理事）